

# 情報技術の匠

PROFESSIONAL

第35回  
オンデマンドの匠 たくみ

## イノベーションを求めて

「うーん。こればかりは生で見てももらないと…。口で説明するのはちょっと難しいですね」と、杉山は言葉を詰まらせた。趣味だという皆既日食について、その魅力を語ってもらおうとしたときのことだ。

言葉に慎重になるのは、日食の美しさについて語るのが難しいからだけではない。「言葉」に並々ならぬ関心を抱いている杉山は、何かを説明しようとする際に、できるだけ正確に伝えたいと考える。だからこそ、言葉を選ぶときに慎重になってしまうのである。

「システム構築において、お客様に技術的な支援をさせていただくとき、

とても大切なことがあります。それは、お客様から説明していただいた内容を、できる限り抽象化して、端的かつ分かりやすい言葉で表現し直して確認することです。SE(システムエンジニア)にとって、かなり重要なスキルだと思っています。お客様は、求める機能について言葉を尽くして説明されようとしています。わたしたちは、一言も聞き漏らさないようにするだけでなく、その中から大切だと思われる言葉を選び出し、それをキーワードにシステムを作り上げていかなばなりません。お客様との間で言葉の定義があいまいなままプロジェクトを進めるべきではないのです。これは、要件定義における問題というだけではなく、日常的に交わ

す会話についても言えることです」

杉山がコンピューターに興味を持ったのは高校生のころ。「パソコン」という言葉がまだ市民権を得る前のことだ。

いわゆるワンボードマイコンと呼ばれる組み立てキットでプログラミングを楽しんだのが、コンピューターとの出会いとなった。マイコン専門誌に掲載されるプログラムを打ち込んで、ゲームを楽しんだりもした。

東京の大学に入学するまでは浜松に住んでいたが、千葉の親せきに泊まりに行く際には、必ず途中下車して秋葉原に寄るほどマイコンにのめり込んだ。

「プログラムを打ち込むだけで、当時は買えば高価だったテレビゲームと同じものが動くのが面白かったんですね。自分にとって必要なものを生み出すことができるプログラミングの妙に感動したということかもしれません」

ただ、大学で電気通信工学を専攻した理由は「趣味が高じて」というだけではない。当時、日本アイ・ピー・エム株式会社と新聞社が共同開発した新聞製作システムの広告記事を読んで、世の中を変革する「コンピューター」の世界にかかわりたいと考えたからだ。プログラミングによ



杉山 広幸 (すぎやま ひろゆき)

日本アイ・ピー・エム株式会社  
オンデマンド・ビジネス  
ODBソリューション・センター  
ICP-アドバイザー・ITアーキテクト

### [プロフィール]

1988年、日本IBM入社。日本橋事業所にてメインフレームのシステム評価を担当しながら、お客様にオープンシステムの技術支援サービスを提供。1995年、現組織の前身であるクライアント/サーバ事業推進に異動し、オープンシステム、e-ビジネスのシステム構築SIを経験。2006年、オンデマンド・ビジネスにて、RFIDやSOAを核として企業をイノベーションするソリューションのITアーキテクト・設計に従事。新しい技術をいかにITシステムに適用できるか日々悩んでいる。

で「自分に必要なものを生み出す」だけではなく、「社会に貢献するシステムを生み出したい」という気持ちが募り、卒業後は日本IBMに入社することを決め、SEになることを志望した。

「やはり、作ったものをすぐ使ってもらえ、喜んでもらえる醍醐味だいごみというんでしょうか。その意味では、わたしにとっての原点は、ゲームのプログラミングなのかもしれません」

入社当初は、大型コンピューターの評価を担当したが、「社会に役立つシステムにかかわりたい」という思いは抑えがたく、幾つかの部門を異動しながら、損害保険業界のお客様のe-ビジネス・インフラ基盤設計や、製造業界のお客様の情報ポータル構築を担当するなど、常にお客様と接点を大切に仕事に取り組んできた。

現在、杉山は、主に製造業のお客様に、CRM( Customer Relationship Management )、SCM( Supply Chain Management )、PLM( Product Lifecycle Management )というITソリューションを提案して、企業のイノベーションを実現するお手伝いをITアーキテクトとして担当している。従来のCRMやSCMに続くソリューションを「ネクストCRM」「ネクストSCM」と名付け、RFID( Radio Frequency Identification )をはじめとする最新のテクノロジーを活用し、お客様の仕事のやり方を変革するシステムアーキテクト設計に励んでいる。「わたしたちが取り組んでいるソリューションを、具体的なサービスとして提

供できるようになるのはもう少し先のことですが、お客様に役立つシステムを提供したいという気持ちはあいかわらず強く持っています。それで、今までの成果を携えて、積極的にお客様のところに伺っています。

新しいテクノロジーが世の中に役立つようになるには時間が必要ですが、一気にイノベーションを起こす可能性もあります。例えば、ハードディスクや大容量メモリーを内蔵したデジタルオーディオプレイヤーは、まさに生活の中の音楽のあり方を変えました。そういった普通の生活にイノベーションを起こすシステムがつくればいいなと思っています」

話を皆既日食に戻そう。

杉山が、皆既日食の観測ツアーに参加したのは1994年11月のペルー。残念ながらこのときは薄曇り。次に行った1995年10月のタイでは約6分間の天体ショーを堪能できた。1997年3月のモンゴリは最悪で、雪が舞っている状態。1998年2月のベネズエラではカリブ海を見ながら環皆既食を楽しんだ。そして1999年8月のドイツ、2001年6月の南アフリカと毎年のように観測ツアーに参加した。

もともと日食や天体観測に興味があったわけではない。最初に参加したペルーのツアーは「ナスカの地上絵」を見たいと思い参加したツアーに、たまたま日食の観測が含まれていたにすぎない。

しかし、タイで初めて見た皆既日食は本当に素晴らしいものであった。「ライブで見て、筆舌できないほど感動したのです。ですから、観測ツアーに参加する人たちは、高倍率の天体



望遠鏡など高価な機材を用意することが多いのですが、わたしは生で見るのが大切だと思っています」

なぜか皆既日食が観測できる場所はいわゆる秘境が多い。普段は飛行機の直行便が出ていないような土地に行けることも、大きな楽しみである。

杉山が日食にこだわるのは、実はもう一つ理由がある。「あまり言いたくないのですが、『日食の観測』を持ち出すと、お客様に休暇を取ることをお願いしやすいのです。天然現象ですから日程は正確に決まっています。プロジェクトの最初の段階で『何月何日に日食があるのでよろしくお願いします』と事前に手を打っておくことさえ可能です(笑)。ですから、プロジェクトの進捗には遅れが出ないように気を遣いますね」。

ただ、プロジェクトはコントロールできても、家族の賛同を得るのは難しい。結婚後に観測ツアーに参加できたのは、ドイツの1回だけ。だからこそ、2009年7月に小笠原辺りで観測できる日食には期待している。「国内ですし、季節もいいですから、家族全員で見に行きたいと思っています。特に、まだ1度も見ていない息子も8歳になっていますから、ぜひ体験させたいですね」

家族全員による「感動のイノベーション」に向けて、杉山の個人プロジェクトは密かに進んでいる。